



大規模コーパスを用いた接続助詞「から」「ので」の研究 その異同と特性について

著者	李 惠正
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第455号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59981

題目：

大規模コーパスを用いた接続助詞「から」「ので」の研究—その異同と特性について—

執筆者名：李 惠正

論文要旨

本研究では、複文の前件と後件を原因結果関係に結びつける代表的な接続助詞「から」「ので」を研究対象とし、大規模日本語コーパスを用いて現代日本語における両者の使用傾向と用法について分析を行った。

「から」「ので」の用法には類似点が多いため、両者の同異点に関する研究が現在に至るまで数多く行われてきた。中でも、永野(1952)は「から」「ので」について7つの相違点を挙げ、両者に生じる相違点は、「から」では前件と後件の関係が主観的に、「ので」では客観的に結びつけるためであると主張した。

この永野(1952)をはじめとする先行研究で主張されている「から」「ので」の相違点について再考するために、本研究では大規模日本語コーパスを対象とし、「から」「ので」の使用実例に対する定量的な分析を行った。具体的には、「から」「ので」複文の前件を中心に、「丁寧体と普通体との共起」、「モダリティ表現との共起」、また、モダリティ表現の中でも「推量表現との共起」という3つの観点から両者の使用傾向を分析し、「から」「ので」の使い分けを形態的な側面から考察した。この3つの観点から、「ので」の持つ丁寧さが関わる接続文体における相違点、話し手の心的態度を表すモダリティ表現に注目した「から」「ので」の主観性/客観性の問題の再解析、未定や不確かなことを表す推量助動詞とは共起し難いと言われている「ので」の実際の使用実態の考察を行うことが本研究の目的である。

上記の目的のために本研究で用いた調査手法は、大規模コーパスによる実際の使用例からの分析である。この大規模コーパスとは、現代日本語の書き言葉全体像を把握するために国立国語研究所が中心となって構築・完成した日本語大規模コーパスである「現代日本語書き言葉均衡コーパス; BCCWJ」である。

本研究では、現代日本語の書き言葉の全体像を把握することを目的に構築された BCCWJ に収録されている3つのサブコーパスの中から7つの媒体(レジスター)を調査し、その中から接続助詞として用いられた「から」の用例 42,435 件、「ので」の用例 91,733 件を抽出した。この調査データを基に、上記の3つの観点による考察の結果から現代日本語における「から」「ので」の使用傾向と使い分けに関するいくつかの規則を明らかにした。以下に、本研究で考察した3つの観点ごとに、その調査概要と結果についてまとめる。そして、「から」「ので」が主に使用されるレジスターについても述べる。

第一の観点は、「から」「ので」複文の前・後件の接続文体という観点における相違点である。「から」「ので」と「丁寧体」「普通体」との共起に関する調査(第4章)では、「から」「ので」の使い

分けの1つとして指摘されている「ので」の待遇的な機能について考察した。

永野(1952)などでは、「ので」は待遇的な機能を持っており、そのため客観的な表現の多い文章で用いられ、対者的な配慮が見られる丁寧な文体をとる傾向があると主張されている。この主張について検証するために、「から」「ので」複文の接続文体を調査し、「から」は「普通体+普通体」の形式にその使用が大きく偏っていることを明らかにした。これはこの形式が「から」の典型的な形式であることを示している。一方、「ので」は前・後件の文体形式に拘らず「から」より使用頻度が高いことから、理由節を表す接続助詞として幅広く使用されていることが明らかになった。特に、「普通体　　ので、丁寧体」の形式が最も多用されていることから、本研究では文体の丁寧さと「から」「ので」の使い分けには関連があると結論づけた。

第二の観点は、前件末のモダリティ表現との共起傾向における相違点である。モダリティ表現との共起に関する調査(第5章)では、「から」「ので」の「主観的」「客観的」な性質について論じた。永野(1952)などで論じられている、「から」は「主観的」、「ので」は「客観的」に前件と後件を接続するという主張を検証するために、「から」「ので」を含む複文の前件末に用いられるモダリティ表現と「から」「ので」の共起関係を考察した。この調査では、BCCWJの出版サブコーパスの「書籍」を調査データとし、モダリティ表現を用いる文が前件に現れた際の「から」「ので」との共起様相を調べ、その結果から「から」と「ので」が前件と後件をどのように接続するかについて考察し、以下のような結論が得られた。「から」は話し手の個人的な感情や意見を介入しないモダリティ表現と主に使用され、前・後件を「客観的」にとらえる働きをしている。その一方で、「ので」は話し手の個人的な見解を交えて述べるモダリティ表現と主に共起され、前・後件を「主観的」にとらえる機能をしている。

第三の観点は、不確かなことを述べる推量表現と「ので」の共起可否に関するものである。この推量表現との共起に関する調査(第6章)では、モダリティ表現の中でも特に推量表現に焦点を当て、「から」と「ので」との共起傾向について考察した。「ので」はその客観性のために推量表現とは共起しないことが永野(1952)らによって主張されているが、その議論は「だろう」「でしょう」との共起に関するもののみであり、他の推量表現と「から」「ので」との共起傾向については述べられていない。そこで、BCCWJの4つのジャンルを対象に、「だろう」「でしょう」と同様に推量を表す「らしい」「ようだ」「みたいだ」「かもしれない」「はずだ」の5つの表現について「から」「ので」との共起傾向を検証した。その結果、推量表現を含む発話では、話し手の情報に対する信頼度の高低に基づいて推量表現が選ばれられると考えられる。前件の事柄に対する話し手自身の信頼が強く、前件の事柄自体を強調する場合は「から」を用いる一方で、前件の事柄に対し、信頼度が低い場合は前・後件の因果関係を強める場合に「ので」を用いると言える。

最後に、「から」「ので」が主に使用されるレジスターに関して上記の調査結果から次のことが明らかになった。「から」は公共的な性質を持つ「新聞」「雑誌」と「書籍」の一部分、制限された場における発話を中心とする「国会会議録」のようなレジスターにおける使用が多い。これは「から」が話し手の個人的な感情を介入しない明確な根拠である前件を好み、自身の主張を強める性質を持つためであると考えられる。一方で、「ので」は、比較的自由な言語表現と話題による情報伝達をされると考えられ、話し手自身の見解や個人的な考えを根拠にすることが

多い「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」「書籍」のようなレジスターにおいて主に使用される。

以上のように、大規模書き言葉均衡コーパスを用いた本研究の結果より、接続助詞「から」「ので」の使い分けに関する相違点について、今まで「主観的」「客観的」という二分法によって漠然と行われていた区別をより多様な側面から明確にすることができた。

提 出 者	李 恵正
論文審査担当者	(主査) 教授 後藤 斉 教授 千種 眞一 教授 齋藤 倫明 准教授 小泉 政利
論 文 名	大規模コーパスを用いた接続助詞「から」「ので」の研究 —その異同と特性について—
<p>本論文は、複文の前件と後件を原因結果の関係で結びつける代表的な接続助詞「から」および「ので」を取り上げ、両者の使用傾向と用法について、接続文体、モダリティ、推量表現という三つの観点から、大規模日本語コーパスから抽出した使用例を用いて定量的な分析を行い、その異同と特性を考究したものである。</p> <p>第1章では、これまでの「から」と「ので」の異同に関する研究を概観した上で、本論文における問題意識と目的を述べる。第2章では、接続助詞「から」と「ので」の出自と機能を概観したのち、その異同についての永野(1952)に始まる先行研究を批判的に検討する。従来は「から」と「ので」の違いが「主観的」および「客観的」という二分法によって漠然と説明されるにとどまっていたこと、および、諸説の間には不一致があることを確認する。第3章では、本論文で使用する資料とその使用方法について説明する。用いられるのは、国立国語研究所が構築し、2011年に公開した「現代日本語書き言葉均衡コーパス」であるが、本論文ではその全体を一律に扱うのではなく、研究目的に則してジャンルを選択して使用することが述べられ、さらに具体的な検索方法と抽出された例文の概要が提示される。</p> <p>第4章では、接続文体、具体的には前件・後件それぞれにおける丁寧体と普通体との共起関係に注目し、「ので」が持つとされる待遇的な機能を中心に検討が行われる。「ので」は比較的幅広く使われるが、丁寧さの傾向が強いことが示され、ジャンルの間に見られる出現パターンの違いの要因についても考察される。</p> <p>第5章では、「主観的／客観的」の違いをより明確にするために、前件末に現れる、話し手の心的態度を示すモダリティ表現に着目する。「から」の方がモダリティ表現との共起数が多いものの、「ので」が共起するモダリティ表現は多様であり、特に話し手の個人的な見解を交えて述べるモダリティ表現と多く共起していることなどが示され、永野(1952)等に見られる見解が支持されないことが論じられる。</p> <p>第6章では、前件における「らしい」や「ようだ」などの未定や不確実なことを表す推量表現との共起関係が扱われる。分析の結果として「ので」が推量表現と共起しないという先行研究の観察は必ずしも妥当でないことが示され、話し手の情報に対する信頼度に基づいて話し手自身の主張を強める場合は「から」が、前・後件の因果関係を強調する場合は「ので」が使用される傾向があることが主張される。</p> <p>第7章では、結論として「から」と「ので」の使用傾向を、接続文体、丁寧さの傾向、共起するモダリティ表現、共起する推量表現、主な使用レジスターの観点からまとめ、最後に今後の課題に言及する。</p> <p>以上の成果は、従来は「主観的」および「客観的」という二分法によって漠然と行われていた区別を、コーパスからの多数の実例を分析することによって多様な側面から実証的に示したものである。従来の研究を修正するような指摘も少なからず含まれていて、この分野の研究の発展に大きく寄与するものである。</p> <p>よって、本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	